

教会の七つの柱③ —— 交わり

彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをなし、パンを裂き、祈りをしていた。（使徒 2:42）

しかし、神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。（Ⅰヨハネ 1:7）

今日のテーマは、七つの柱の第三——「交わり」です。初代教会の信徒たちは、御言葉と祈りの生活の中で、互いに深い交わりを持っていました。この「交わり」ということばには、単なる人間関係以上の意味が込められています。

「交わり」と訳されているギリシャ語は「コイノニア (κοινωνία)」。

この語は「共有する」「分かち合う」という意味を持ちます。つまり交わりとは、何かと一緒に“持つ”こと。それは単なる会話や付き合いではなく、“いのちや恵みを分け合う関係”のことです。初代教会の人々は、神の愛と御霊を共有し、喜びも悲しみも共に担いました。彼らは共に集い、共に祈り、共に食卓を囲みました。信仰を共に生きる——それが「コイノニア」の姿です。

Ⅰヨハネ 1:7 には、「**光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち**」とあります。ここで強調されているのは、交わりの源が“光の中”にあるということ。つまり、私たちが神との関係において正直であるなら、人との関係も開かれていくのです。自分を飾らず、隠さず、光の中で生きるとき、互いに受け入れ合い励まし合う関係が生まれます。交わりは、光の中に立つところから始まります。

現代の教会でも、交わりはとても大切な柱です。礼拝や学びだけでなく、“食卓を共にする時間”には特別な力があります。食卓は、心を開く場所です。同じパンを裂き、同じ食事を分け合う中で、私たちは互いの存在を受け入れ合います。それはまさに、主の晩餐を小さく再現しているようなひとときです。共に食べ、共に笑い、共に涙を流す——そこに教会のいのちが流れています。

私たちの教会も、この「コイノニアの恵み」を深めていきたいと思います。それは、無理に仲良くすることではなく、“光の中で真実に生きること”です。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く。そのような交わりの中に、キリストの愛がかたちとなって現れるのです。

分かち合いの問い：

- ① 主にある「交わり」があると実感できるのはどんなときですか？
- ② 教会の中で、より深い交わりを育てるためにできることは何でしょうか？